

出版業界連続学生セミナー サマーセミナー2019 現場学習会報告



良い本には

「よい作家」、「よい編集者」そして「よい印刷会社」が必要なのだ(和田有史副社長)、
と大切なことを知る機会となり、とても良い経験になりました。

共立女子大学 文芸学部3年 坂東 美典

出版業界に就職を希望する大学生を対象に、開講4年目を迎えた「出版業界連続学生セミナー」は、昨年に引き続きエッセイストの山口ミルコ氏を講師に迎え、5月から4カ月間、連続9回のサマーセミナーを開講した。座学のみならず、書き手として身に着けたい視点と取材力を養うために、実際に様々な職種の現場を訪問するのがこの講座の特徴だ。今回は平河工業社、河出興産、富澤、三社の全面的な協力をいただき、印刷、出版倉庫、本の再処理現場を見学した。紙の本の誕生から終焉まで、まさに「一本の一生」を学生達はこのようにとらえたのだろうか。紙の本の誕生から終焉まで、まさに「一本の一生」を見学に際し、お力添えをいただいた各社ご担当様、現場の皆様には紙面をお借りして心より感謝申し上げます。

僕が編集者になった時、印刷会社には妥協なく意見を言うと思う。ここをもっと鮮やかにしてほしい、このような

文学部3年 大島 彩華

私は本を購入する際は表紙のデザインを見て購入することが多いので今回印刷の色彩や技術を見ることができて、とても勉強になった。本づくりにおいて忘れてしまいがちだが印刷は欠かすことのできないもので、こうした多くの技術が結成してできているのだということを改めて実感することができ、とても貴重な経験になった。

武蔵野大学



作するために鉄まで自分で鍛造しているという話には驚いたし、高額な管理、維持コストを払ってもそのハイデルベルグ印刷機を世界で最も多く導入している平河工業社の印刷への拘りの強さには感銘を受けた。日本の出版業界は、こうした技術と製品への拘りに支えられているのだという

共立女子大学

文芸学部3年 中内 咲良

印刷工場では、象のように巨大な印刷機が待ち構えていた。ドイツ製のハイデルベルグ。平河工業社では、自社でメンテナンススタッフを研修し、機械の問題解決に当たっているという。印刷機はものすごい速度で紙を飲み込み、4つ並んだインクタンクの下を通って、色と形を当てられていく。可動していない印刷機の横に上り、インクタンクを覗き込む。私たちがそうしている間も作業員の方達はテキパキと立ち働いている。動きに無駄がない。短い言葉のやりとりで作業を進めている。出来上がったものをチェックし、機械の出力を調整しながら品質を保っているのだ。ここで社員の方から「印刷機のデリバリ(印刷機の排紙部分)を見れば印刷所の質が分かる。大量に印刷される紙の間にはパウダーがまぶされていて、徐々にそれらの塵埃が溜まって機械は汚れていく。目の前の印刷機のデリバリは埃も曇りもなくピカピカだった。

早稲田大学 創造理工学研究科修士2年

佐々木 郁海



加工をしてくださいとか。今回の講義で、遠慮なく意見が言えると確信した。印刷会社には情熱があつて、その熱量を気づかせないほど、私達の周りに作品を送りつけている。作家の情熱を、編集者の僕が受け取り、形にする。そして印刷会社が世に送り出す。講義の終わりに教わった良い作家、良い編集者、良い印刷会社。いつか情熱の伝播を起こしたい。

東洋大学

社会学部既卒 千葉 雄太





稼働する印刷機の傍らでも説明が行き届くようにと、全員にインカムが用意された。「能う限りの最高品質を届けたい」という平河工業社の想いを結集したハイデルベルグ印刷機、轟音をあげる巨体から美しい印刷物が排出されると一斉に驚嘆の声があがった。説明をする松田亮一氏のマイクと個々のインカムが無線同期している。

ことを実感することができた。アメリカのマサチューセッツ工科大学で生まれた色彩の原則を用いて、ドイツ製の機械で日本の印刷工場が本を作る。出版物が国境を越えた繋がりを作っていることに感動した。

法政大学 人間環境学部4年 岡島 良拓

「文化の根源は文字にある」という一文にとっても心が惹かれました。

他に印刷はただ色を薄めているのではなく、網点や4色で表していることは全く知らず、ルーペで網点をしつかり見た経験はとても貴重だなど思いました。網点の印刷が増えることによる、より本物のような印刷になることに技術の進歩や印刷している方の腕の素晴らしいにため息が出てしまいました。

今まで考えていませんでしたが、印刷業界への就職も視野に入れて活動してみたいと考えています。

共立女子大学 文芸学部4年 山口 胡桃

一番衝撃を受けたのは、印刷の方法です。私はそれまで、印刷とは機械がコンピューターのイメージ通りにインクを紙に印字して物理的に行うものだと思っていました。しかし実際は、印刷には大量印刷をするための版(ハンコ)が必要不可欠で、その版は水と油の性質を利用して化学的に作られているということでした。活版印刷が始まった当初から続いている伝統的な「版」という技術と、今日の科学技術の融合に「印刷」のロマンを感じました。和田副社長さんがおっしゃったように、印刷会社はイメージを的確に伝えられる表現力、コミュニケーション能力を共に備えた編集者になりたいです。

お茶の水女子大学

生活科学部3年 大島 佳子

編集者を目指してこの講座を受けてきたが、印刷の仕事もとても魅力的だ。直接書籍を創り上げていく感覚が、見学を通して感じられた。なにより、平河工業社で働く皆さまの表情が心から輝いて見えて、プロフェッショナルが本気で仕事をしている貴重な現場を見せていただけたことが本当に嬉しかった。インクひとつや、色味の出し方、紙の質など、ひとつひとつを丹念込めて創り上げていて、今まで読んできた本をもっと読みたい。本のもっと向こう側に踏み込みたいと思うに至った。

共立女子大学

国際学部3年 野崎 比那



平河名物の熱血印刷講座は、写真上段左から和田有史副社長、中村友美、松田亮一、下段の桐原淑郎の四氏が、印刷の歴史からミクロの単位の技術論に至るまでを懇切丁寧にひも解き、高精細の美しい印刷物は、初めて印刷の世界を垣間見る学生達を魅了した。



和田副社長がおっしゃっていたのですが、料理の本なら「おいしそうに見せて!」「旅行の本なら「旅行に行きたくなるような感じだ!」と編集者からリクエストされるのだそうです。私は最近ビジュアルに惹かれて料理の本を買ったのですが、三日月坊主、自炊など考えたことがなかった私がお弁当炊きライフを一ヶ月以上続けられるくらいに作る気力を湧きあがらせてくれて、今ではすっかり料理が趣味になりました。今までもなんとなく眺めていましたが、きっと編集者と印刷会社の方がおいしそうに印刷してくれたのだらうな:と気が付いて、とても感激しました。印刷会社の方々の努力も売り上げにかかわっているのだと知りました。

工場見学を通して、知らなかった印刷工場について理解することができ、出版社だけではなく、たくさんのプロフェッショナル達が本を作っていることがわかりました。

共立女子大学 文芸学部3年 坂東 美典

印刷物への細かな配慮が随所に見受けられた。まず情報漏洩対策に印刷物には紙をかぶせることが、とても小さなことに感じられるかもしれないが、とても大切なことだと感じた。印刷機は全てハイデルベルグ社1社に統一し、品質の同一性を保っている。またメンテナンスは海外に頼むこともなく、自社で対応できるようにしている。インクは一つ一つ手を入れる。その最大の理由はお客様の要望に柔軟に対応するためだ。時には効率を捨て、手で仕事を行うところにごだわりを感じ、機械は常に清潔を保っており、印刷会社の良い悪いを分けるというデリバリはきれいに掃除されていた。

共立女子大学 国際学部1年 南館 杏

富澤新三芳資源化センター、通称「本の死の工場」には月間約1500トン、大型トラック100台分の古紙が運び込まれてくるという。2017年度の書籍の返品率は36・7%にも上る。冊数にして約3・4億冊が返品されており、その中で期限を迎えたものが、出版倉庫から「古紙」として再資源化処理される工場へと運ばれていく。

法政大学 人間環境学部4年 岡島良拓

「このような無駄を出さないでほしいと思う。しかしその一方で、妥協した平凡な本を作ってほしくない。次に繋げる始末は私たちが担うので、自信を持って、沢山の作品を世に届けてほしい」という富澤社長のお言葉に心を打たれた。この人たちがいるから、自分たちに新しい本が届くし、自分たちが弱らずに面白い作品を生み出せる。

共立女子大学 国際学部3年 野崎比那



富澤社長は、「私たちがやっていることは必要な無駄です」とおっしゃった。セミナー室から外に出て、作業員の方々は延々と本をプレス装置に放り込み続けていた。毎日毎日、こうして本が放り込まれ続けることを思うとあまりの果てしなさや不毛さに気が遠くなった。これが必要な無駄なのか。返品本が発生する以上それらのモノを無駄なく使わなくてはならない。そういう意味では必要である。しかし誰の目にも触れないままここに来ってしまう本が多



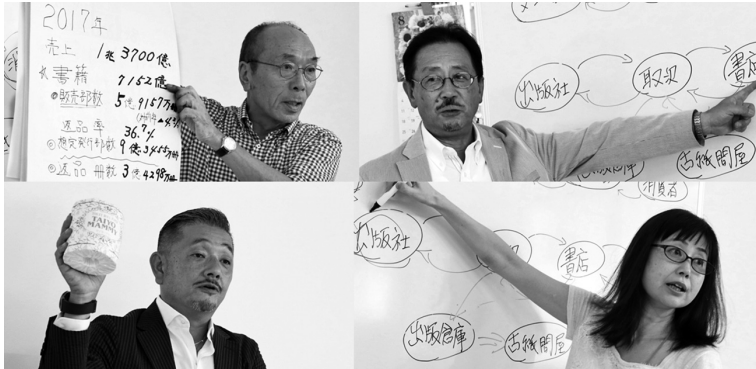
すぎるのが問題だ。見学を通して深まった疑問は、委託制度と再販制度は変えることができないのか？というところだった。委託制度は返品可能だからこそリスクを考えずに様々な本を書店に置くことができるという利点があるが、再販制度は地域間の公平性を保つにしてももう少し柔軟なものにできないだろうか。売れ残った一定期間が経った本は、安くしてでも多くの人に届けられる可能性を高めるべきではないのか。古本市のように、売れ残った本を集めて安く買うことができる市場があれば良いのに、と思う。

早稲田大学 創造理工学研究所修士2年 佐々木 郁海



富澤社長の言葉で、とても印象に残っているものがある。「リサイクルしやすい本を追求して欲しい。全国の読者が多種多様な本を読むために、自分達の会社がある」本の死の工場の社長は、誰よりも理解していた。面白い本を生むために、犠牲はつきものだというところを。全国の読者に本を届けようとするのは、その数は膨大な物になるのはしょうがないということ。本のために本は殺されていた。

富山大学 経済学部4年 中 亮将



複雑な出版流通のしくみ、その現状と課題を分かりやすく説明する(株)富澤の野澤慎一郎顧問、伊福洋常務(写真上段左・右)、富澤進一社長、山口ミルコ氏(写真下段左・右)



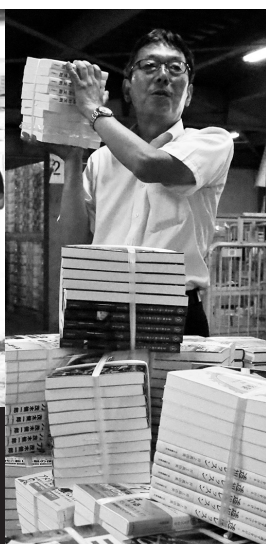
「倉庫は本の死刑台。本の最期を見に行きますよ」衝撃的な言葉に私は絶句した。思えば私は本が生まれることばかり考えて、そのあと、どうなるかまでは何も考えてこなかった。

共立女子大学 文芸学部1年 三輪 奈々花



物流倉庫では出版社が大量に書籍を販売・返品したときに利益が出るそうで、出版社を陰で支えながらも互いに利益が出る環境が異なるのは非常に面白く感じました。また全国の決まった日に雑誌や書籍が販売されるのは物流会社の方たちの努力があったことを知り感謝の思いがこみ上げました。

共立女子大学 文芸学部1年 栗原 咲紀



出版された本は40%は売れ残り返品されるのだという。出版社は取次の本を入れた時点で売り上げと成っている。しかしおよそ60%しか売り上げにはならない。消費者には実際に刷った本の全てを売ったわけでは無いことが分かる。著者の多くはその事を知らず、出版社は違ふ本の売り上げで補おうとして本を出す、また40%返ってくる、これの繰り返しで成り立っている。お話を聞かせて頂く中で出版業界の抱えている問題を改めて実感しました。

共立女子大学

文芸学部4年 浅沼 あやな

自宅にも何冊かカバーと本体の大きさが合わない本があったが、その謎が解けた。改装の際に、本の周りを削っているのだ。ちなみにカバーや帯も注文を受けるたびに新しいものになっている。何度倉庫に戻っても新品扱い。上手いことを考えるなあと思った。ばつと聞くと詐欺のようだが、何度か身を削って誰かの家の本棚に収まる本は歴戦の勇者のようでかつこい。

共立女子大学

文芸学部3年 中内 咲良

倉庫会社の収入は基本料、出入庫料、管理料、返品料で、一冊いくらかという風に各出版社に請求している。故に倉庫会社は本が最終的に消費者のもとへ届くかどうかにかかわらず、本の出入りが激しいほど儲かる仕組みとなっている。本自体は売れていないのに儲かる会社があるなんてとても奇妙に思った。出版業界はとても複雑なのだ。

共立女子大学

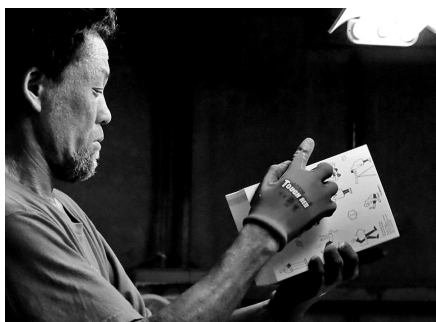
国際学部1年 南館 杏



冷房の無い真夏の出版倉庫、全工程を自ら案内する河出興産（株）荻生明雄社長は、現場で顔を合わせる全職員にあたたかな言葉かけを忘れない。体温を超える構内温度となったこの日、返品品の山の中から担当者が言う。「今日はこれでも今年で二番目に涼しい！」と。

荻生社長から、「返品を減らそうと出版業界は努力しているが、撤く本の量を減らすと売れにくくなってしまふ。最近倉庫に戻さない動きも出てきている。」と今の出版業界が抱える問題やジレンマのお話を伺った。電子書籍で本を読むこともあればAmazonも便利でよく使うが、紙の本や街の本屋がなくなるのは悲しいと私も思う。

共立女子大学 文芸学部3年 坂東 美典



返品された本は、読者の手や日焼けで変色した小口を研磨機で削り、新しいカバーをかけて再び蘇る。手作業による場所が多く、熟練された職人の技が求められる作業だ。



一か月でおおよそ200万部の本が戻ってくる。各社別に仕分けされた本は、カバーや帯が外され、研磨される。本屋さんに置いてあるカバーと本体の高さがずれているものは、こうした過程を経ていることを知った。そして新たなカバーがかけられて、新刊として再び取次配送される。

茨城大学

人文社会科学部3年 久保田 雄大

現場研修を通して、私は、「出版」という仕事は本を出版するまでが終わってはいないことを学びました。一度出版された本は、倉庫に戻されたり、改装されたりと紆余曲折の人生



を歩むこととなります。出版社が生み出し、取次会社が読者の元に届け、その本の旅路で富澤様や河出興産様のそのような物流企業に支えられています。私の想像を遙かに超えた広大なバックグラウンドを持ちつつ、それをおくびにも出さない本たち。その価値は内容だけでなく、その背景にもあると思います。

お茶の水女子大学
生活科学部3年 大島 佳子

「本の一生」を見学してみても本に対する想いに変化した。編集者を目指すうえで自分が関わり生み出した本がどうなるのか、それは知っておくべきだと感じた。一度戻ってきた本をきれいに蘇らせ送り出してくれる存在がいること。そして本にお疲れさまと最後を見届け生まれ変わらせてくれる存在がいること。本にかかわる誰もがそこに愛情をもっているのだと私は現場を見学し実感した。今回の見学ではとても貴重な経験を得ることができ、もし私が編集者になったら今回の経験を忘れず本と関わっていきなさいと思った。

武蔵野大学 文学部3年 大島 彩華



出版平和堂 第51回 出版功労者顕彰会開催

令和元年10月4日（金）正午

より、箱根芦ノ湖畔の出版平和堂に出版関係者約100名が集い、「出版平和堂 第51回 出版功労者顕彰会」が厳かに行われた。当日、台風の影響も心配されるなか、開会の頃には雨も上がり、爽やかな秋の気配が満ちていた。



ちていた。

式は吉野和浩・出版平和堂委員の司会により進められ、来賓・役員の紹介の後、野間省伸・日本出版クラブ会長は挨拶のなかで、「出版界も苦しい状況にありますが、電子出版やWEB広告等、デジタルの分野を中心に良い兆しも見えております。本日、ご顕彰の諸先輩を前にして、皆様の叡智とご経験を次世代の出版界の糧として、新たな出版文化を築き上げて行きたいと思えます」と述べた。

続いて参会者全員での黙祷の後、鹿谷史明・日本雑誌協会理事長が11名の新顕彰者名の奉告を行ない、平林彰・日本出版協会常務理事による献詞奉読が行なわれた。冒頭の挨拶で平

第53回 「出版クラブ納涼の夕べ」 開催



8月19日（月）午後6時より、神保町・出版クラブビルでは初めての「納涼の夕べ」が開催され、約200名の参会者が集った。

夏祭りをイメージした会場では、ジャズバンド「jaja」（写真）の演奏が雰囲気大いに盛り上げ、恒例の福引抽選会は、図書カード・東京ディズニーリゾートチケット・旅行券等の当選が決まる度に大歓声が上がった。

林常務理事は、「逆境厳しき折こそ、今日の出版界繁栄のために切磋琢磨し、幾多の困難を乗り越えてきた先達の不屈の精神に立ち返り、知恵と勇気をもって、眼前の困難に敢然と立ち向かい、出版文化の発展に一層の努力を重ねていかななくてはなりません」と述べた。

引き続き、参会者全員で献花が行われたのち、相賀昌宏・日本書籍出版協会理事長が「私たちが未来に対応していくとき、先達の皆様が得てこられた経験の数々は、大きな力となります。改めて感謝し、皆様の志を私たちも受け継いでいくことをお誓いします」と感謝のことばを述べ、新顕彰者ご家族と役員による記念撮影が行なった。

そして会場を箱根ホテルに移し、矢幡秀治・日本書店商業組合連合会会長による献杯で、和やかな雰囲気の中昼食懇親会が行なわれた。